『お眠り勇者様に姉妹でラブラブピロートーク』

「おっぱい、ぜぇ～んぶ飲まれちゃったね♡」
「姉さん、勇者様はお眠りですから、もう少しお静かに」

　深夜、宿屋のベッドで、見目麗しい僧侶姉妹が肌を晒していた。
　汗をたっぷりと流し、豊満極まりない乳房を母乳で飾り、うっとりとした表情を浮かべている。
　キララとミリアナのラザフォンス姉妹、地母神教会より派遣された、勇者様専用治療係である。

「そだね、勇者様にはしっかりと休んで貰わないと、だし☆」

　姉であるキララは、柔らかな表情でぐっすりと眠る愛しい男を見つめている。

「姉さんって、本当に勇者様のことが好きなんですね」
「当たり前だよ☆　だって、こんな凄いヒト……初めてなんだもん☆」

　キララは、その耳元に唇をそっと近づけて、柔らかい口付けをする。

「ん、ちゅっ☆」

　それだけで幸せになってしまう。
　胸の奥が切なくなって、また、欲しくなってしまう。

「姉さん、それくらいに……」
「ミリアナも、キスしてあげなよ、勇者様の耳が寂しがってるよ☆」

　ミリアナは、姉に促されるまま耳にキスをする。

「ん、ちゅ……本当に……罪なヒトですね……」
「モテモテだよね☆」

　姉妹は、彼を挟み込むようにして擦り寄う。

「もう好き、マジで好き、キミが思っている以上に……」
「私達は……勇者様のことを、愛しています……♡」

　同時に囁いても、安らかな吐息は変わらない。

「いっぱいエッチなことしちゃったからぁ♡　も～っと好きになっちゃったんだよ☆」
「私も……その……勇者様に触られると……ドキドキが収まらなくて」

　切なそうに太ももを擦り合わせ、吐息を耳に掛ける。
　二人の思いが自然と弾ける。

「ねえ……あたしたちってね……」
「勇者様の子供が欲しくてたまらないんです……♡」

　姉妹の気持ちは同じ、女として一番大事な部分を預けたくてたまらない。

「世界が平和になったら、い～っぱい産ませてね☆」
「大地母神様の御加護がありますから、何人でも、かまいませんよ♡」

　顔に浮かぶそれは、母なるものと同じ。
　淫欲の先にあるものを、二人はよく理解している。

「でも、あたしさぁ、もう我慢できないよ……」

　耳たぶを唇で挟みこむ、このまま耳を噛んでやりたいとキララは思う。

「次に宿屋でお泊まりすることあったら、二人でお願いしよっか☆」
「ええ、二人一緒に……孕ませてくださいって♡」
「孕むまで出られない部屋を作ってもらうから☆」

「大地母神様の加護で作るお部屋ですから、絶対確実……ですよ♡」

　勇者様の知らぬまま、姉妹の家族計画は進むのだった……

『お眠り勇者様に姉妹でラブラブピロートーク』（終）